

# 木下杢太郎の欧米体験(1)

鈴木 秀 治

## Abstract

Mokutaro Kinoshita (1885~1945) was a doctor, but, on the other hand, wrote many poems and novels, and also painted. He went to America and Europe for medical study and was given a great stimulation by foreign culture. I am engaged in consideration of the influence which these experiences in America and Europe had on his work.

## 1. はじめての西洋「アメリカ」

最初に着いたのはアメリカであった。1921（大正10）年のことである。医学研究の目的でアメリカを皮切りにキューバ、イギリス、フランス、ドイツ、エジプト、イタリア、スペイン、ポルトガルなどの土地を回って歩いた。その人は、姓は大田、名を正雄という。のちに細菌研究で世界的な業績をあげることになる医学者であり、また同時に文学者であった。

この大田正雄は、若き日から木下杢太郎と号し、文筆をとっては詩、小説、戯曲、評論に多彩な才能を発揮した。今回の洋行で、若い頃に憧れていたヨーロッパに留学するという機会に恵まれた。だから詩人木下杢太郎の積年の願いを果たしてくれるはずであった。ところが、現実とは異なるものであった。今回の3年半にわたる洋行は、医者である大田正雄としては目に見える成果をもたらしたものの、詩人である木下杢太郎にとっては創作意欲のわくことの少ない日々であった。いや、先を急ぎすぎた。詳細は後回しにして本論にもどろう。

杢太郎の外国体験はこれが初めてではない。1916（大正5）年から1920（大正9）年にかけて医者として中国に渡っていた。杢太郎31歳から35歳の働きざかりであった。この中国体験は無視できないけれど、ここでは触れないでおく。杢太郎の30代は医者として、また文学者として多忙の日々であった。この期間は中国、欧米と外遊が続き（通算して7年半の長さ

に及ぶ)、また私生活では33歳のときに結婚して、長男をもうけている。公的にも私的にも充実した期間であったが、文学者としては徐々に文壇から離れていったために、詩、戯曲、小説といった純粹の創作は筆が進まないことが多かった。それでも、単行本として美術評論集『印象派以後』、翻訳リヒャルト・ムウテル『一九世紀仏国絵画史』、詩集『食後の歌』、初期文集『地下一尺集』、翻訳『支那伝説集』、戯曲集『空地裏の殺人』、美術紀行『大同石仏寺』を刊行しているから、文学者としても充実した日々だったといっている。

中国に約4年滞在したのち、杳太郎は満州から船に乗り、ようやく日本の土を踏んだ。日本でひと息ついたのも束の間、半年もたたぬうちに再び外国の旅に出た。1921(大正10)年5月、横浜出帆の日本郵船「諏訪丸」の乗客となった。アメリカ、イギリスを経て、ヨーロッパはフランスのパリに赴くつもりである。

最初に訪ねる国は、英語を使うアメリカだった。それなのに、「諏訪丸」の船上で杳太郎は英語を好まないと告白している。もともと杳太郎は語学の才に恵まれた人であった。若い頃から晩年に至るまで、外国語への関心はとだえることがなかった。杳太郎の外国語といえば、なんといってもまずドイツ語である。独逸協会中学で手ほどきされたドイツ語は、第一高等学校に入学してさらに訓練を積んで進歩した。1911(明治44)年には、来日していた東洋美術研究者グラザー夫妻の通訳をかってでるほどドイツ語は達者であった。

次にはフランス語がくる。同じく東京帝大の医学生だったころ(23歳)、薬物学の試験日をまちがえて留年となったことがある。思いもかけない大きな休暇となったこの一年で、フランス語の基礎を修めた。それから後も折りに触れて勉強を続けたけれど、先生についてきちんと勉強したことはなかった。それでも、フランス語学習をしていたので、フランスに渡ったときには、さっそく役に立ってくれた。さらには、30代前半の中国滞在中に学んだ中国語もある。この中国語学習は、のちに『支那伝説集』の翻訳刊行となって実を結ぶことになる。

今回の留学をきっかけとして、スペイン語、ポルトガル語、さらにはイタリア語にまで手を広げることとなる。英語も使えるには使えたが、英語会話を好まない杳太郎にとってアメリカ行きには不安もなかった。「わたくしは英語を好まず、殊に英語会話を喜びません。最初亜米利加に行くことになった宿縁が、わたくしの心を不安にします。」(「諏訪丸にて」)この不安は杞憂に過ぎなかった。アメリカ滞在中に言葉のことで困ったことはいっつもなかった。

6月上旬、アメリカ西岸ヴァンクーヴァ港に到着、自動車に乗って市内を見物し、杳太郎は初めて「西洋」の土を踏んだ。この都市をはじめとしてシアトル、サンフランシスコ、ロス・アンジェルス、セントルイス、シカゴ、ボストン、ニューヨーク、ニューオーリアンズ、タスカローザ、ワシントン、ニューヨーク(2回目)、フィラデルフィア、ボルチモア、フィラデルフィア(2回目)の各都市を順に訪問する。これに加えて、7月中旬から約2週間のキューバ行きがある。

アメリカで何をするかという、まずそれぞれの土地で医学者、研究者（とりわけ皮膚科専攻の）に会って情報交換することである。そのために各地で大学や病院や植物園を訪れた。今回の外遊はなんといっても医学研究が一番の目的であった。この医学者や研究者との交流の次第は、大学の恩師である土肥慶蔵宛の手紙3通に詳しい。それ以外には、美術館や博物館巡り、芝居や映画（活動写真）の鑑賞、いわゆる名所見物つまり観光旅行などに日を送った。このアメリカ滞在中に書かれた紀行文は「北米通信」としてまとめられている。

杢太郎はもともと画家志望で、生涯にわたって自ら絵筆をとった人間である。『木下杢太郎画集』全4巻（用美社）と『百花譜』全1巻（岩波書店）にまとめられた画業を見ればわかるように、決して素人の手すさびではない。また若くから美術批評を手がけて、『印象派以後』なる著書を上梓している。さらにリヒャルト・ムーターの『一九世紀仏国絵画史』も翻訳刊行している。杢太郎が画家であり同時に美術批評家であるならば、自分が訪れたアメリカの美術館についてなんらかの記述があつてしかるべきだが、「北米通信」でいくらか触れているだけで、その書きぶりはそっけないものである。『日記』にもわずかな数行の記述を見るばかりである。

アメリカでいちばん多く見る機会があつたのはフランス印象派の作品だった。杢太郎がもっとも関心を抱いていた画家たちであつたから、シカゴ美術館、ボストン美術館、メトロポリタン美術館などで熱心に見学した。モネ、マネ、ルノワール、シスレー、ピサロなどである。「10年前にこれだけのものが見られたつたら甚だ幸福だったでせう」（「北米通信、ヌウ・ヨーク」）と書き残している。

ボストン美術館の東洋美術のコレクションは世界有数のものであるが、「我々の眼では、日本のもの、支那のもの、さして驚くを要しませんでした」（「北米通信、ボストン」）とわずか2行で片付けている。またこの美術館で一人の婦人がたくさんの浮世絵を借り出して鑑賞している姿を見て、「今更ここでかう云ふものを――見るだけの気分には、然しどうしてもなりませんでした」（「同上」）と書き、浮世絵に対して否定的な見解を示している。

アメリカでもっとも興味を持ったのは、エジプト美術と漢陶（漢代の中国陶器）であつた。前者はカイロ美術館にあるいわゆる村長像（木像）のレプリカをシカゴ美術館で見たのをきっかけとして、ニューヨークのメトロポリタン美術館で開催された「埃及古墳発掘の材料の展覧会」によってさらに関心を深めることになる。エジプト文明、エジプト美術の問題はそれまで無関心だった。杢太郎は、古代エジプト墳墓の構造、共葬殿などに漢唐の古墳、明器と類似するものを認め、両文明の関係を架構空想して楽しんでいる。

漢陶にはボストン美術館で出遭った。以前にラウファーの本で聞き知っていたが、実物を見たのは今回が初めてである。古代ギリシャの陶器のように、玻璃様、雲母様に光り、緑、褐などの釉をつけていた。ラウファーの学説によると、この漢陶によって漢時代の埋葬の方式を理解し、画像石とあわせて当時の風俗、農牧、家政の状態をうかがいみることができる。

またトルコ、シベリヤの民族より得た影響をも認識できるという。

エジプトの文明（古代エジプトと漢唐）、中国の漢陶（漢唐とトルコ・シベリヤ）、この両者の提起する問題はすぐれて比較文化的である。この時点で杢太郎が比較文化的な発想をとっていることに注意を促しておこう。

## 2. エキゾチズムの旅「キューバ」

アメリカ滞在も1ヵ月を越してこの国の生活にも少し慣れてきたころ、急にキューバ行き話が持ち上がった。もともと今回の欧米紀行ではキューバを訪れる計画はなかった。けれども、アメリカを「早く卒業したい」（「北米通信、ボストン」）と考えていた杢太郎にとってキューバの旅は魅力的だった。「此途方もなく大規模な常識主義（アメリカのこと）から逃れ出したいと云う心になりましたから、此地の医学者及び植物学者が、サンチアゴ及びタスカロザの地がわたくしの或研究に好都合であると暗示するや、わたくしの異域を喜ぶ心は、一も二もなく之に同意し、わたくしは軽しくもクウバ行を企てました」。（「クウバ紀行」）

このキューバ訪問は最初からエキゾチズムが横溢していた。専門の皮膚疾患の分野についても、ロマンチックな空想をたくましくしていた。つまり、『アラビアンナイト』に出てくる5色の魚のように、緑、紅、紫などの斑点でぎざぎざしている人間の皮膚病（ピントオ）が見られるだろう。また医師ドウバン（杢太郎の戯曲「医師ドウバンの首」の主人公）の秘蹟に載せられても当然である不思議な毒草をも採集できるだろうと考えたのである。

キューバではハバナとその近郊サンチャゴ・デ・ラス・ベガス村を訪れた。この国の公用語はスペイン語である。当地で出会った多くの医者たちは好意的であって、スペイン語がよくわからない杢太郎をあちこち連れまわってくれた。医者たちとは英語とフランス語でなんとか意思を疎通させることができた。こんなぐあいに、たくさんの医者に紹介してもらったり病院を案内してもらったりした。さらには土地の新聞に杢太郎の到着が報じられもした。まるで自分が「操り人形」のようだったと杢太郎は記している。

ハバナから足を伸ばしてサンチャゴ・デ・ラス・ベガスまで行ってみたけれど、5色の皮膚病菌や不思議な毒草を手にいれるというロマンチックな夢は実現できなかった。杢太郎自身も認めているように、このキューバ行きは医学研究としては失敗であった。けれども詩人杢太郎とすれば、むしろ逆に大きな収穫のあった旅行だといえよう。

今回の欧米旅行で、ほとんど唯一といってよいほど、心を動かされた国がキューバであった。「それこそまるで子供の時、色着けの覗写真で空想した「西洋」といふものが生きて来たやうであった」（「サンチャゴ・デ・ラス・ベガス」）と述べられているように、幼い日にあこがれていた西洋に似たものを感じたのである。そこには、若い頃に長崎を訪れたときの気分と共通するものがあつた。しかも好意を寄せていたラテン系の国であつたから、なおのこと

杢太郎のエキゾチズムは刺激された。

1907 (明治40) 年、まだ医科大学の学生だった頃、新詩社の同人と一緒に九州を旅行したことがある。同行は与謝野寛、北原白秋、吉井勇、平野萬里であった。長崎を中心にして平戸、天草、島原などをまわった。九州のキリシタン史蹟を訪ねて、いぜんから関心があったキリシタンの歴史に目が開かれる思いがした。

長崎という街は東西文化のつぼである。早くから大陸との交流があり、まず中国的なものの影響がある。さらに熱心なキリスト教信者がいて、キリシタン鎮圧の時代でも隠れキリシタンとして自分の信仰を守った。また、江戸時代の出島は、日本と西洋の窓口であり、江戸時代の鎖国政策から免れた唯一の出入り口である。外国文化が日本文化に侵入して独特な伝統をもつ土地になっている。

そんな長崎の雰囲気、エキゾチズムに興味をおぼえて、「天草組」におさめられている南蛮詩を制作した。同人たちから影響を受けて、杢太郎は苦もなく詩がかかるようになったという。同じく長崎旅行に同行した北原白秋も、杢太郎と張り合うように『邪宗門』に収録された南蛮詩を書いた。二人の若い詩人が互いに影響を与えあった。

まるでその当時と同じように詩心が湧き上がり、キューバではいくつもの詩が生まれた。「海ははるばる朦朧としての女人のすがた」と表題のついた7篇の詩のうち6篇がこの旅で作られたのである。すなわち、「窓掛のかげ」「海日玲瓏」「傍観者」「南島の夜」「知」「該里酒」である。そのひとつを掲げてみよう。

#### 該里酒

あめりかびとみずの  
亜米利加人は水を飲む。  
あたまにくは  
頭ほどの肉を食む。  
さらあまばいも  
皿に余る果餅を盛る。  
せいぎりち  
正義、理知、  
しやうげふきんしゆ  
商業、禁酒、  
きよだいばなりてえくに  
巨大なるBANALITÉの国よ。

わがふねも、されば、めでたし、  
クウバ通ひ、MEXICOとぞ呼ぶ。  
われにあた いっさん せりい さけ  
われに与ふ、一盞の該里の酒。

せりい はじ なれ し  
該里よ、わが初め、汝を知りしは、  
こあみちやうこふす いえ  
小網町「鴻の巣」の家。  
ときなれみみ  
その時汝耳にほてり、

われは聴きき、呂昇の歌の空鳴。

(さなり十……十幾年の昔……)

呂昇は已に老いぬ。

われも亦漸く老いんとする。

楽しきかな、真夏の船路、

日はうららか、波ははるばる。

悲しきかな該里の酒。

アメリカで出会ったのは、まずアメリカ人の旺盛な食欲であった。水も肉もパイも貪欲に平らげる。そんな国で唱えられているのは、正義、理知、商業、禁酒といったお題目だった。だからアメリカはパナリテ（常識主義）の国なのである。それならばこの国をしばし離れ、メヒコ号なる船に乗りキューバにゆくのもまことにけっこうである。（「めでたい」とは杳太郎が使う最大級の賛辞である。）だからどうか一杯のシェリー酒をわたくしにふるまってほしい。

このシェリー酒を初めて口にしたのは、日本橋小網町のレストラン「鴻の巣」であった。1909（明治42）年から1910（明治43）年の頃、「パンの会」に集った文学青年、美術青年たちは月に1、2回ぐらいに会合をもった。そのときに会場としてときどき使われたのが「鴻の巣」の家だった。青年たちは「メエゾン・コオノス」とフランス語風に呼びならわしていた。杳太郎は「パンの会」の中心人物であった。

そんな回想にふけていると、シェリー酒でほてった耳に、昔聴いた女義太夫の呂昇の歌が聞こえたような気がした。そうそうあれは10年前、いや10幾年も昔のことだった。あの呂昇はすでに老いてしまった。自分もまたようやく老いようとしている。（杳太郎の若い日に、女義太夫が流行していた。いまの流行歌手のように人気があった。御多分に洩れず杳太郎も熱を上げた一人であった。）

ふと外に目をやると、空が晴れて日はうららかである。おだやかな波がはるばると続いている。こんな真夏の日に船で旅をするのはまことに楽しい。けれども、わたくしが杯を傾けているシェリー酒はどこか悲しみの味がする。

ここには、若き日の情熱は影をひそめている。アメリカへの反発とキューバへの期待が歌われているが、その期待もそっと示されるだけである。そして若い時代の回想が続く。思い出すことができるだけの過去をもっているならば、すでに年をとったのである。かといって、老いたというわけではない。この詩を書いたのは36歳のときなのに、詩人はすでに老いを自覚している。

書き上げたのは詩だけではない。散文でも「クウバ紀行」の名品が生まれたのも、キューバ行きの成果である。三島由紀夫は『文章読本』の中で、「私がいちばん美しい紀行文と信ずるのは、木下杢太郎氏の文章であります。」と書いている。その例としてあげているのが、この「クウバ紀行」であることに注意を促しておく。その一例を掲げてみよう。ハバナのオテル・プラザの5階にある屋上園で、若いドクターおよび検疫医とともに夕食をとったときの文章である。

屋上園の晩餐はすばらしく好い気持でした。薄暮は長く、日の陰<sup>かげ</sup>った後も蒼天はいつまでもいつまでも鮮碧の輝を保って居ました。四方の遠き海は碧き空よりも更に碧く、そして卵色の四角な遠き家々が、夏の宵<sup>なつ よひ</sup>の遠近<sup>ベルスベクチフ</sup>法の憧憬<sup>ベルスベクチフ</sup>の視感を一層高調しました。そして月が東天に現はれ、市庁の円蓋の頂の鍍金の裸体神像を輝かしめ、夕霞はまた近き遠き家々の屋根また軒<sup>のき</sup>の蛇腹<sup>じやばら</sup>の鋭い丹碧、黄緑等の色彩を程よいほどに薄めます。こんもりとした遊園<sup>プラザ</sup>の菩提樹、それを超えて遠船<sup>とほふね</sup>の燈<sup>ひ</sup>が見えます。まるで我々がシャヴァンヌの「聖ジュヌヴィエヴ」の画帖中の人となったやうです。そして黒のキャビヤ、亜米利加にはない白葡萄酒——（「クウバ紀行」）

杢太郎は絵筆をペンにかえて、暮れなずむハバナの夕景を描いている。自ら絵筆をとる人らしく、色彩のとらえかたも繊細である。いつまでも鮮碧の輝きを保っている空、碧い空よりさらに碧い海、卵色の遠い家々。市庁の円蓋の頂きにある裸体神像の金色、近い遠い家々の屋根また軒蛇腹の赤と青、そして黄緑など。最後に食卓に並んでいるキャビヤの黒、アメリカにはない白ワイン。これをターナー風というか印象派風というべきか、うつろいゆく夕方の風景を感覚的にとらえている。

アメリカに戻る船は愉快でなくサービスも悪かった。行きの航海の感興が文学的であったのに対し、帰りは科学的（持っていった本の抄録をつくること）になったと、杢太郎は「クウバ紀行」の中で記している。ニューオルレアンで下船してのち、鉄道でアラバマ州のタスカローザに向かった。この小都会では農科大学を訪れ、二人の学者と会っている。そこからワシントンに立ち寄りニューヨークに戻ったのは8月6日であった。

### 3. 再度の「アメリカ」

そのニューヨークからフィラデルフィアに移り、ペンシルバニア大学のワイドマン教授と会う。その教室で、ようやく腰を落ち着けて研究の日々を送った。アメリカ滞在中にこれほど1ヵ所にとどまって仕事をしたのは、今回が初めてであった。9月中旬、ニューヨークから海路イギリスに向かって出発するまで、フィラデルフィアに滞在した。

奎太郎はアメリカをどうとらえただろうか。はたしてこの両者に接点があるだろうか。欧米といっても、奎太郎は基本的にはヨーロッパ志向であって、アメリカのことはほとんど念頭にない。実際にアメリカの社会と文化の中にはいってみても、心を動かされることは少なかった。アメリカ滞在を終えて、イギリスに向かうアクイタニア号の船上でアメリカ体験を次のように総括している。

わたくしは亜米利加ではさして大きな情動を受けませんでした。つまり、鉄、石炭等を基礎とする大きい工業に対しては、こちらにそれを見て驚くだけの予備知識もなく、また興味もなかったのも、雲煙過雁に眺め過ぎたのに過ぎなかったからです。理知の方面でも、わたくしの求めた方面だけでは（医学、美術）何も予想外のものに遭遇しませんでした。（「郵船アクイタニアより」）。

アメリカでは大きく心を揺さぶれることが少なかった。専門の医学研究でも、新しい発見はなかった。好きな美術についても、ほとんどすでに知っていることばかりである。ただ、初めて見た漢陶やエジプト美術だけは印象に残っている。学問研究は別にして、アメリカ滞在の番外編としてキューバ旅行は忘れられない思い出となった。

#### 4. 「ロンドン」滞在と南蛮熱

奎太郎は9月20日、サザンプトンで下船し、鉄道に乗り換えて同日にロンドンに着いた。初めてのヨーロッパ訪問である。イギリスではもっぱらロンドンに滞在して、他の都市を訪れることもなかった。その期間は約1ヵ月である。このロンドン滞在は「倫敦通信」に詳しい。アメリカのときと同じように、何人かの学者に会ったり、学会にも出席してみたけれど、英語力が十分でなく全部を理解するのが困難であった。また、奎太郎の求めているものは、この都市で得ることが難しかった。

そこで、何をしたかという、ブリティッシュ・ミュージアムに通ったのである。まず最初は美術品を見ることから始めた。ギリシャ、エジプト、アッシリアなどの美術は、まだ受け入れるだけの用意がなかった。それに反して、インドや中国の古美術は以前から親しんでいるので、余裕をもって見ることができた。特別の便宜で、スタインの蒐集した唐画も見ている。

ブリティッシュ・ミュージアムに通っているうちに、その図書館が使いやすいことに気がついた。フランシスコ・ザビエルに関する書籍を調べてみると、各国語の文献は50種を超えている。ザビエルはキリシタン研究の格好の題材である。この出遭いをきっかけにして、奎太郎自身の語っている「南蛮熱の復興」がはっきりと姿をあらわしてしてくる。まだ学生のとくに九州旅行をしてキリシタン史蹟を回り、キリシタン史から題材を取って詩（「天草組」）



や戯曲（「天草四郎と山田右衛門作」）を書いたことがある。これが第一の南蛮熱であった。

アメリカ滞在の最後に、未完のままであった「天草四郎と山田右衛門作」の最後の2幕を日本に書き送っていた。これが南蛮熱復興のそもそもの初めである。ロンドンに着いて、その南蛮熱はもう少し進んだのである。ではなぜザビエルかというと、その研究は、単に戯曲的興味でなく、また単に日本文明的興味でなく、もっと深いところまでわれわれを導くであろう。さらに、日本と西洋の文明および思想に対する批評の地盤の上からそれを観照することは、有益で興味ある問題だからである。

杢太郎はまだスペイン語が読めなかったけれど、スペインの劇作家ロペ・デ・ベガの作品で、ザビエルを登場人物とする2つの戯曲を書き写した。ザビエルへの関心はパリに渡ってからも続いてゆく。けれども、その研究は神学の知識、ラテン語、スペイン語、ポルトガル語、イタリア語、フランス語など語学の修得が必要になるので、片手間仕事ではとうていできない。南蛮熱の復興を単純に喜べないわけである。

ロンドンでは古書店めぐりをした。この楽しみはアメリカでは経験しなかったことである。ここでは古本屋が多く、ことに東洋に関する書籍に心惹かれた。ラウファールの漢陶に関する書は見つからず、日本のイエズイット教に関するイタリアやフランスの書籍はたくさん見出した。アンリ・コルジェの『ビブリオテカ・シニカ（中国書誌）』は買いたいと思ったが高価なのであきらめた。ここではまだ、キリシタン文献より東洋美術に関するものを集めたかったようである。

ロンドンで初めてオペラというのを見て（『マダム・バタフライ』）、はなはだ失望した。戯曲としての構造がはなはだ弱いうえに、無知な、遊戯的なエキゾチズムが芸術を駄目にしていただけである。けれども、翌晩にワグナーの『ローエングリン』を見て、考えを改めたという。ドイツの巨匠ワグナーの精神は、音楽の素養のないという杢太郎にも十分に感知されたからである。

杢太郎は「倫敦通信」の中で、10年前の自分の心に、今よりずっと美しい点を見出し、10年の社会生活が自分の心にためた不純な<sup>おろ</sup>澱を憎んだと書いている。10年前といえ、まだ東京帝大に在籍していた20代の頃であり、新進の詩人として文芸雑誌『昂』などに精力的に作品を発表していた時期に相当する。なるほど若い時代の心は純粹で美しいものかもしれない。しかし、それはまだ生活の現実にはぶつかっていないからではないか。生活の現実にあたらば、人間の不純な面をいやでも知らされる。杢太郎はこう書き続ける。「わたくしには何れの日にか落ち着いて長い創作をする運が回ってくるのでせうか。」

創作を職業にしている人間ですら、落ち着いて長い創作をする時間など回ってくるはずがない。創作をすることが自分にとって、やむにやまれぬものであれば、必ず創作の時間を自ら作りだすにちがいない。創作活動を運の問題と考えている以上、この時の杢太郎は本物の作家とはいえない。この欧米体験は、紀行文を別にすれば、詩や小説や戯曲といった純粹

な創作をもたらすことが少なかった。文芸についていえば、これを機にして、むしろ歴史や考証といった学問的な執筆が多くなる。

医学研究ではあまり成果が上がらなかったけれど、南蛮熱の復興で歴史や文学に関してはそれなりの収穫があった。あとはロンドンを発ってパリに行くばかりである。

## 5. 「パリ」到着後3ヵ月

10月27日にパリに到着した。今回の留学で、滞在期間も一番長く本腰をすえて研究生生活を送った街がパリだった。このパリおよびフランスについては、「大寺の前の広場」「サン・シュルピスの広場から」「巴里日記」「巴里より」「ブルタアニュ」「パリ近事」「巴里の宿から」など多くの紀行文が書かれている。

杢太郎の日記は少年時から晩年までよく保存されていて、岩波書店刊行の『杢太郎日記』全5巻に収められている。欧米体験の時期も日記が残されている。それを読むとパリ滞在当初はひんぱんと日本人に会っていることがわかる。とくにパリ到着直後は毎日のように何人もの日本人と顔をあわせている。当時パリに「日本人会」という組織があり、パリ在住の日本人のたまり場になっていた。杢太郎も例外に漏れず、この日本人会に足しげく通った。

パリ滞在の最初（3ヵ月ほど）のうちは、医学研究のほうは棚上げにして、もっぱら語学の訓練に時間をさいた。ベルリッツの語学学校に通うかたわら、二人のフランス人から個人教授を受けている。その一人は日本に来たこともあるノエル・ヌエットであり、もう一人は女性教師のベケエであった。外国語に上達するには、まず外国人と交流するのが一番である。ところが、杢太郎はフランス人と交わるより、むしろ日本人とつきあうほうが忙しかったようである。

とはいうものの、日本人とのつきあいも必ずしもマイナス要因になるわけではない。美術史家児島喜久雄との出会いは杢太郎にとっても、また児島にとっても幸運であった。二人の出会いはこれが初めてではない。杢太郎が東京帝大に入学し、児島が一高に入った年に、三宅克己の指導する水彩画教室の写生会で出会ったのが最初であった。杢太郎は画家志望だったし、児島も絵を描くことも見ることも好きで、話が合ったのである。けれども、お互いが専門の世界に入ってゆくうちに、この交友はとぎれてゆく。その二人がはからずも異国の都パリで再会を果たしたのである。

児島は一月前にパリに到着していたが、友人が一人もいなくて淋しい思いをしているときだったので、杢太郎の出現はほんとうにうれしかったという。もちろん杢太郎も昔から話のわかる小島との再会は願ってもないことだった。肝胆相照らすというのはこの二人の仲を言うのであろう。パリでの二人の生活ぶりを児島の回想から引いておこう。

大田君が来てからは殆んど毎日行動を共にして居た。天気の良い日は美術館へ行ったり、展覧会を見たり、画商を回ったりしてレストランやカフェで思いのままに芸術を談じた。音楽会やオペラや劇場へも頻りに通った。一緒にテオドール・デュレー氏を訪問したのも其頃だった。時としてはグラン・ショーミエールのアカデミーの回数券を買ってデッサンをやりに行ったこともある。(「太田君と私」『ショパンの肖像—児島喜久雄美術論集』所載)

奎太郎もまたこうしたパリの日々が楽しかったのだろう、『日記』の中で「巴里は非常にいい。児島喜久雄君とよく一緒に歩く。昨日はデュランルエル主人の家に行った。画が一杯だった。今日は有る画商の家でデュレーに会った。遊びに來いと云うので土曜日にゆく。又、或る画商の家でマネやクルペーを沢山見せて貰った」と書いている。(この一節は日付が不明だが、内容を考えるとパリ到着まもない頃の記述であろう。) 見るもの聞くものどれもがおもしろかったのである。語学の勉強を別にすると、仕事から離れてパリで自分の好きなことばかりしていた。

もちろんこのような日々がいつまでも続くわけではない。奎太郎がなかなか研究を始めないので、むしろまわりの医者仲間のほうが心配しはじめた。新田義之氏の『木下奎太郎』によると、パリに来ていた先輩の田村春吉が仲立ちとなり、宮島幹之助の紹介をもらってまずパリ大学のブリュンプト教授を訪問し、さらにブリュンプト教授からサン・ルイ病院のサブロー教授に紹介されたということである。こうしてようやく医学研究を始めたわけである。

ここで、今回の留学のもつ問題のいくつかを考察してみよう。なぜ奎太郎は留学先としてフランスを選んだのであろうか。もともと日本の近代医学はドイツ医学の影響が強かった。語学についていえば、ドイツ語なら学生の頃から習熟していて、読み書き話す能力に秀でていて、あらためて勉強する必要はなかった。それなのにドイツではなくてフランスに渡ったのはなぜだろうか。その問題に関して、長兄賢次郎宛の手紙(1922.3.18.：未投函)の中で、奎太郎はこんなふうに説明している。内容をかいつまんで紹介しておこう。

自分の専攻している学問は、人や動物に寄生し疾患を惹き起こす植物学である。日本では動物性寄生病学は進歩しているが、植物学の方面においてはまだ専門家がない。自分も興味があったからこれを選んだのである。この学問はフランス(ことにパリ)において最も研究の便宜が得られる。

これが、医学研究を理由にした公的な理由である。けれども、それ以外に別の理由もあっただろう。画家を志していた20代の頃、一番関心があったのはフランス印象派だった。また30代にはリヒャルト・ムーターの『一九世紀仏国絵画史』を翻訳して、フランス絵画を紹介

している。また大学生の頃から、フランス語にも興味があり、その発音の美しいことも知っていた。ヨーロッパを理解しようとするとき、その文化の精華はドイツではなくフランスにあると杢太郎は考えていた。こうした公的および私的理由のために、杢太郎はフランスを選んだのである。

杢太郎の留学を考えるときに、先達としてまず上げられるのは森鷗外と夏目漱石である。杢太郎は同時にこの二人と接点をもっている。東京帝大学生で文学の創作に励んでいた頃、杢太郎は鷗外の観潮楼に足しげく通っていた若者の一人であった。彼らは親しみをこめて鷗外を「千駄木のメエトル (maitre : フランス語で「師」の意味)」と呼びならわしていた。文学芸術に関わる問題だけでなく人生のさまざまな問題についても、メエトルから学ぶことが多かった。そんなわけで、杢太郎自身が欧米に留学するにあたって、心に留めていた先例が鷗外であることは間違いない。

杢太郎の処女小説集『唐草表紙』は、鷗外と漱石という二大文豪に序文を寄せられたことで注目される。漱石とは面識がなかったけれど、懇切丁寧な序文を書いてもらった。まだ新進の作家だった杢太郎にはこのうえない幸運であった。先輩の小説家として漱石を尊敬はしていただろうが、その留学のことが念頭にあったかどうかはわからない。

この二人と杢太郎が異なっているのは、鷗外・漱石は官費での留学であり、杢太郎は私費の留学だったことである。しかもその費用は、妻正子の実家である河合家に負担してもらったことである。要するに、杢太郎の留学は紐つきだった。そのために不自由な思いを忍ばなければならぬこともあった。

杢太郎はパリでの研究は具体的にどの大学・病院で、どの教授に就くべきかをはっきり決めていなかったらしい。現在でも研究者の留学だったら、しかるべき大学や研究機関において、師事すべき教授を決めておくのが普通である。その前提がない杢太郎の場合はきわめて異例な留学だったといえる。新田義之氏は『木下杢太郎』の中で、官費留学と私費留学を日本近代史の文脈の中で位置づけながら、杢太郎の留学を「遊学」と呼んでいる。

いま前提がないといったが、まったく白紙だったわけではない。パリで就くべき教授としてサブロー博士のことは念頭にあった。アメリカ滞在中フィラデルフィアで研究していた時、杢太郎は1921 (大正10) 年8月10付の『日記』の中でこんな言葉を書き残している。

Micr. furfur は倫敦で Dr. Castellain を訪ひ、そこで英文に写し、Micr. de nouvelle spec は Dr. Sabouraud の処で書き上げよう。

この記述によれば、少なくともサブロー教授とは連絡をとっていたと思われる。パリで研宄生活に入る際に、結果としては周囲の人たちの手をわずらわせたことになったが、杢太郎自身の研究計画がまったくなかったわけではない。しかも、杢太郎は学問研究に対しては真

摯であり、また勤勉でもあった。形式的には「遊学」であったかもしれないが、内実を考えるとその言葉は当てはまらないように思われる。

今回の欧米体験の本来の目的である医学研究を始めると、楽しかったパリの生活は、はるか遠くのことになってしまう。杢太郎の言葉を引用してみよう。「言葉の為めと、一般文化の感得の為めとに専ら費した三箇月の間は、巴里は実に甘美であったが、仕事場の裡に入ると、科学の一般性が天竺鼠の臭気と共にわたくしの心に浸透して、仏国及び巴里の特殊感情はずっと遠のいてしまった。」（「大寺の前の広場」）

（続く）

#### 注

木下杢太郎からの引用は、『木下杢太郎全集』全25巻（岩波書店）および『木下杢太郎日記』全5巻（岩波書店）に拠った。引用にあたっては新字・旧かなづかいとした。

〔本論文は愛知大学研究助成 C-52を受けている。〕